秋の大騒動

ＭＵＫＫＵ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
秋の大騒動

【Ｎコード】
Ｎ８３５９Ｉ

【作者名】
ＭＵＫＫＵ

【あらすじ】
新一達のクラスに転校して来た転校生が新一に惚れてしまい新一に積極的にアプローチ。そのせいで蘭と少し疎遠ぎみになってしまった新一が哀に相談すると…

第1章　朝の風景（前書き）

とりあえず春夏秋冬の『秋編』ですが秋関係無いです。

第1章　朝の風景

木の葉が色付き始めた頃の朝、毛利蘭が工藤邸のチャイムを鳴らすと、
『…ハ～イ…蘭か？』
と家主の眠そうな声がインターフォンから聞こえてきた。
「うん！新一オハヨー！！」
と蘭が答えると新一は、
「ああ…おはよう…」
と答えてインターフォンを切った。
２，３分後、眠そうな顔で新一が工藤邸から出てきて蘭を家に招き入れた。
「まったく…その様子じゃまた徹夜で推理小説読んでたでしょ！？」
と蘭が呆れながら聞くと、
「まあな…」
と答えた。
蘭は溜め息をついてから、
「じゃあ朝ご飯作っとくから早く準備しちゃいなさいよ！！」
と新一に言った。

現在、朝７時０５分。
蘭や新一が通っている帝丹高校は工藤邸から３０分あれば簡単に着くのだが、一人暮らしで生活のリズムが崩れ気味でよく朝食を抜くことの多い新一のために蘭は毎日早く来て簡単な朝食を作っているのだ。

「ところで新一…新一が徹夜してまで推理小説読むってことは昨日

買った小説ってことよね？…昨日発売された推理小説なんて無かったと思うけど…最近事件無いから今まで忙しくて読めなかったわけじゃないし…」
と蘭が作った朝食を嬉しそうに食べている新一に蘭が聞くと、
「ああ…来月発売の父さんのナイトバロンシリーズの最新作だよ…昨日送ってもらったから…」
と答えた。
　新一はいつも父親で世界的な推理小説家の工藤優作の本を発売日前に優作に送ってもらっているのだ。
「ふーん」
と蘭が言った時、新一は朝食を食べ終わり、
「さて…行くか！！蘭！！」
と蘭に言って2人で登校した。

「おっ！！今日も夫婦一緒に登校か！！相変わらず仲睦まじいね～！！」
「ピューピュー」
新一と蘭がクラスに入った途端にクラスメートが冷やかしてきた。
「まだ夫婦じゃねーよバーロ！！」
と新一が叫んだ。
　新一と蘭が付き合い始めたばかりの頃は『夫婦』と言われても2人共否定しなかったのだが、だんだん気恥ずかしくなってきてしばらくしてからまた2人共否定するようになったのだ。　新一のセリフを聞いた園子は、
「おやおや～新一君今『まだ夫婦じゃねー』って言ったね～『まだ』って！！じゃあ将来的には夫婦になるってことですかな～！？」
とニヤニヤしながら2人に聞いてきた。
　園子のセリフを聞いた途端クラスメート達は一斉に、

「オオー！！！」
とどよめいた。
「そ…園子〜！！」
と蘭が顔を真っ赤にして叫んだが、園子の耳には届いていなかった。

ちなみにこれは毎日の事であるが、新一と蘭は全く慣れることは無く、さらにクラスメート達も飽きる様子も無かった。
そしてこの騒ぎは担任が来るまで続くのである。

第2章　転校生（前書き）

オリキャラ名字の『清水』は『清』という字で清らかさを、『真美』という名前は『真の美』という感じに美人を強調したくて付けました。

最初は『清水麗』にするつもりだったけど探偵達の鎮魂歌に似たような名前の人がいたので止めときました。

第2章　転校生

クラスの皆が新一と蘭を冷やかして騒いでいると、担任が入って来て、
「ハイハイ…いいから席に着け！！」
と言った。
その途端にクラスの皆は一斉に静かになって席に着き、解放された新一と蘭もやっと席に着いた。
新一は席に着くなり眠り始めた。
「ちょっと新一！？」
と通路を挟んだ隣の席にいる蘭が注意したが、昨日優作に送られた最新作の推理小説を何度も読み返して完全な徹夜となっていたのですでに爆睡していた。
そんな中担任は話しを始めた。
「えーっ、今日からクラスメートが1人増えることになった。清水さん入っていいぞ！」
その声で廊下から入って来た転校生を見て、爆睡している新一以外の男子が一斉に、
「オオー！！」
とどよめいた。
転校生は茶髪でロングヘアーで整った顔立ち、大きな瞳でスタイルもいい…つまりかなりの美人だった。
「清水真美です！！よろしくね！！」
自己紹介も明るくて、男子達にはとても好印象だった。
「清水さんの席は…工藤の隣が空いてるな…あそこで爆睡してる奴…あいつの隣の席に座ってくれ」
と担任は真美に言い、転校生と新一は隣同士になったのであった。
真美が、
「オーイ！！工藤君…だよね？名前…起きてる～！？」

と新一に話し掛けたが新一は全く気付かなかった。

新一が目を覚ましたのは1時限目の終了のチャイムが鳴った時だった。

「ファ～ァ…」

と新一が欠伸をしていると、誰もいないはずだった隣の席から、

「あっ！工藤君起きた？」

という聞いたことの無い声が聞こえて、隣を見たら知らない女の子がいたため、新一は驚いて、

「うわっ！？」

と声を上げて椅子ごと倒れてしまった。

「ちょっと大丈夫？人見てそんなに驚くの失礼でしょ！！」

と蘭は新一の椅子を立て直しながら新一に注意していたが新一はそんなことを気にせずに、

「だ…誰？」

と真美を見ながら聞いた。

（うわ―！！さっきまで寝てて顔よく見えなかったけど…すごいイケメン！！こんな人が隣なんてラッキー！！）

と新一の顔を見て思った真美は、

「私、転校して来て工藤君の隣の席になった清水真美！！よろしくね！！」

と笑顔で答えた。

真美は普段この笑顔で男を虜にしているのだか、新一は不振人物では無いことが分かって興味を無くし、さらに眠かったため、

「ああ…よろしく…」

とぶっきらぼうに答えるだけであった。

2時限目の途中、

ブーッ、ブーッ
と携帯のバイブの音がした。
また居眠りをしていた新一はその音で目が覚め、自分の携帯が鳴っていることに気付いて携帯を見てみると、画面に『目暮警部』と表示されていた。
新一はその表示を見るやいなや立ち上がり、
「先生！！すみませんが…」
と言った。
先生はいつもの事だというように、
「行って来い」
と言うだけであり新一はすぐに電話に出て、
「工藤です！！あっはい分かりました！！」
と言って、教室を出ようとしていた。
さっきまでの眠そうな気配はどこにもない。
「新一！！」
蘭は新一を呼び止めて、
「どうせ捜査に熱中してお昼忘れるだろうからハイお弁当。気付いたらちゃんと食べるのよ！！」
と言って新一に弁当をわたした。
「ありがとよ！！」
と新一は笑顔で言って教室を出て行った。

第3章　ロックオン（前書き）

なんか題名があってない気がします。
オリキャラの真美がメインです。

第3章　ロックオン

新一が教室を出て行った後、何事もないように授業が再開されたが、初めてのことで慣れていない真美は前の席にいる男子に小声で話し掛けた。

「ねぇ…工藤君どうしたの？出てっちゃったけど…なんかあったの？」

と尋ねると、話し掛けられた男子は、

「いつものことだぜ…なんかあったって…事件だろうな警察にでも呼ばれたんだろ…」

と何事も無いように答えた。

「け…警察！？」

と真美が驚いていると、

「ああ…清水さんは知らないのか…あいつ探偵でよく警察に捜査の手伝い頼まれるんだよ…聞いたことあるだろ？高校生探偵の工藤新一…あいつがそうだよ…」

と真美に教えた。

「ふ～ん…」

と真美は答えて、

（へーっ彼があの工藤新一だったんだ…！！工藤君か～いいな～よし決めた！！工藤君を私の彼氏にしようっと！！）

と考えていた。

すると、さっき新一が出て行く時に弁当を渡していた女子の事が気になったので、またさっきの男子に話し掛けようと、

「ねぇ…えーっと…」

と呼び掛けたが、名前を聞いていなかったので名前を呼べずに『えーっと』になってしまった。

そのことに気付いた男子が、

「あっ俺、中道よろしくな！！」

と名前を教えてくれたため、
「うんよろしく中道君！！…ところで工藤君が出てく前にお弁当渡してた女の子…工藤君の彼女？」
と聞いた。
中道は、
「ああ…毛利か…工藤の奥さん」
と普通に答えた。
「お…奥さんって結婚してるの！？」
と真美が驚いて聞くと、
「結婚はしてねーな…いつも夫婦って冷やかしてるだけ…あいつ等いつも一緒にいるから…なんでも親同士が仲良くて物心ついたころにはもう一緒にいたみたいだぜ…でも付き合い始めて半年も経ってないと思うぜ…」
と答えた。
「そっか…ありがとね！！」
と中道にお礼を言うと、真美は隣の隣の席にいる蘭を見て、
（ふーん…毛利さんか…なかなか美人だけど私の方が上かな～…まあ…これなら私の勝ちね…）
と思っていたが、その視線に蘭は気付いていなかった。

休み時間、蘭と園子が話しをしていると、
「あの一…毛利さんだよね？私清水真美！！よろしくね！！」
と真美が話し掛けてきた。
「うんよろしく！！私毛利蘭！！席が近いし仲良くしようね！！」
と蘭は笑顔で答えた。
そんな蘭を見て園子が、
「蘭って誰とでも仲良くなれるよね～」
と笑いながら言ってから、

「私、鈴木園子よ！！」
と真美に言った。
「うんよろしく！！」
と真美は答え、３人で話をしていた。

放課後、蘭が真美に、
「ねぇ清水さん家どこ？」
と聞くと、
「私、米花町５丁目よ」
と答えたので、
「じゃあ私と一緒だ！！私と園子と一緒に帰ろ！！」
と真美を誘った。
「ええ」
と真美が答えたため、３人で帰ることになったが、園子はなんとなく真美に気を許せないでいた。

第４章　放課後の帰り道（前書き）

なんかよく出てくる刑事さん達一気に出したって感じですね…

第４章　放課後の帰り道

「じゃあ私こっちだから！！じゃあね！蘭と清水さん！」
「また明日園子！！」
「じゃあね～！」
園子を別れた後、蘭と真美がしばらく歩いていると、
たくさんの野次馬がいた。
「毛利さん…何かあったのかな？」
と言って真美が野次馬の中に入って行ってしまい、
「あっ！清水さん！待って！」
と蘭が真美を追いかけるはめになった。
蘭が真美に追いついて野次馬の最前線に来ると、
「あら蘭ちゃんじゃない！！」
と聞き覚えのある声がした。
「さ…佐藤刑事！！」
と蘭が驚いていると、
「オー！！蘭君じゃないか！！工藤君ならあそこだよ」
と佐藤刑事の言葉で蘭に気付いた目暮警部が新一を指差して言った後、新一を呼んだ。
「よーっ！！今から帰りか？蘭とえーっと…」
新一は真美の名前を忘れている様子だ。
「もーっ！！新一！！失礼でしょ！？名前忘れるなんて…清水真美さんよ！！」
と蘭に怒られて、新一は、
「ワリー、ワリー…」
と新一が真美に誤ると、真美は、
「いいって！！それより工藤君事件は解決したの？」
と尋ねた。
「あぁ…終わったぜ」

と新一は犯人の方を指差した。
そこには白鳥警部と千葉刑事に連行されている犯人の姿があった。
「あのー…今日高木刑事は？」
と蘭がに聞くと、
「高木君なら、この後、工藤君を送ってく車のエンジンをつけに行っとるよ！」
目暮警部がと答えた。
すると、佐藤刑事が、
「そうだ！！蘭ちゃんも乗ってかない？どうせ同じ方向だし！」
と言った後、真美に、
「あなたもどう？同じ方向なんでしょ？」
と言った。
2人が「乗ってく」と答えたとき、
「あれ！？蘭さんどうしたんだい！？」
という高木刑事の声がした。
「あっ高木君、蘭ちゃんとこの女の子も一緒に送ることになったけど、いいでしょ？」
と高木刑事に気付いた佐藤刑事が聞いた。
「はい！！いいですよ！！」
と高木刑事は笑顔で答えて、蘭達は新一と一緒に高木刑事と佐藤刑事に送ってもらうことになって。

「～♪」
佐藤刑事が鼻歌を歌いながら運転してると、
「あの～、高木刑事と佐藤刑事これからお食事にでも行くんですか？」
と新一が2人に聞いた。
「えっ！？どうして分かったんだい工藤！？」

と高木刑事が驚いて新一に聞くと、新一は笑いながら、
「まず、高木刑事の声のトーンがいつもより高い気がしたこと今佐藤刑事が鼻歌を歌いながら運転していたことです。僕は佐藤刑事に何回か送ってもらったことありますけど鼻歌を歌いながら運転していたのは初めてです。これは2人共いいことがあったのではないかと思って、そのことにお2人の関係を踏まえると2人でこれからどこか行くんじゃないかと思ったんです。で、この時間帯なら2人で食事に行くんじゃないかと予想したんです」
と答えた。
「流石、工藤君ね！由美に教えてもらったのよ！お洒落で美味しい店があるって」
と佐藤刑事は感心しながら答えた。

「ねぇ…毛利さん…由美って誰のこと？」
と真美が蘭に聞くと蘭は、
「由美さんは佐藤刑事の親友で警視庁の交通課の婦警さんよ！」
と答えた。
その時、新一はポツリと
「あの人、微妙に園子とキャラ被るんだよな…」
と呟いていた。

第5章　車内での会話

新一が工藤邸の前で佐藤刑事達の車を降りた後、蘭は思い出したように佐藤刑事達に、
「そういえば…目暮警部と白鳥警部が一緒にいるなんて何か大きな事件だったんですか？あんまり大きな事件じゃないと警部さんが2人もいるなんて少ないし…」
と聞いた。
すると佐藤刑事が、
「ああ…それはさっきの事件、最初は白鳥君いなかったんだけど、工藤君が今白鳥君が追ってる事件に関係があることに気付いて白鳥君呼んだのよ！で、白鳥君の情報でさっき蘭ちゃん達が来た時に解決したってわけ」
と説明した。
　するとその話を聞いていた真美が、
「毛利さんって警察の人にたくさん知り合いいるね～！やっぱり名探偵の工藤君といつも一緒にいるから？」
と蘭に聞いた。
　すると蘭は、
「まあそれもあるけど一番はお父さんの仕事の関係でよく事件と遭遇しちゃうってことかな？」
と答えた。
「…お父さんの仕事の関係？」
と真美が不思議そうに聞くと高木刑事が、
「蘭さんのお父さんも工藤君と同じ名探偵なんだよ！名探偵毛利小五郎…ほら『眠りの小五郎』だよ最近は少しスランプみたいで事件解決に時間がかかるけど…」
と答えた。
　蘭の父親毛利小五郎はコナンが新一に戻った後、今まで自分が解

決した事件（解決したのは殆どコナンだった頃の新一だか…）の調書を松本警視に借りて、それを見返して勉強することで今までよりは推理力が上がっているのため、今までより時間はかかるが自力で事件解決できるようになってきたのだ。（たまに蘭がこっそり新一に事件の内容を話してアドバイスを聞いて小五郎にヒントを与えているが…）

「へーっ！！毛利さんのお父さんあの眠りの小五郎なんだ…でも最近推理するとき眠りのポーズしないっていうね！」

と感心しながら真美は言った。

「う…うん…」どうして小五郎があんなポーズで推理してたのか知っている蘭は曖昧に答えることしかできなかった。

ちょうどその時、

「さあ蘭ちゃん着いたわよ！！」

と佐藤刑事が車を止めた。

毛利探偵事務所の前に着いたのだ。

「ありがとうございます」

と言って蘭が車を降りた後、佐藤刑事は真美に向かって、

「あとはあなたの家だけど…どこか教えてくれる？」

と聞いた。

すると真美は、

「いいです！ここなら近いですから！！」

と言って車を降りた。

「そう…じゃあね！！２人共！！」

と佐藤刑事が車を発進させた後、真美は蘭に、

「ねぇ毛利さん…これから蘭ちゃんって呼んでいい？」

と聞いた。

蘭が笑顔で、

「もっちろん！！」

と答えると真美は笑いながらで、

「じゃあね～！！蘭ちゃん！！」

と手を振りながら行ってしまった。
蘭も手を振りかえした後、探偵事務所へ入っていった。

第6章　蘭と真美（前書き）

駄文です…

第6章　蘭と真美

次の朝、新一がいつものように蘭の作った朝ご飯を食べていると、
ピーンポーン
とチャイムが鳴った。
蘭はすでにいるため事件の依頼かと思い、
「はい！！工藤新一です！」
と出ると、
「工藤君！！おっはよう！！」
とハイテンションで真美が言った。
「し…清水さん…どうして？」
と新一が驚いていると蘭も出て来て、
「清水さん！どうしたの？」
と驚きながら尋ねた。
「蘭の家に行ったら蘭ちゃんのお父さんが工藤君の朝ご飯作りに行ってるって言ってたから！！」
と笑顔で答えた。
実はこれは建て前で新一を迎えに行くのに蘭が新一の迎えに行くのに着いて行った方が自然だと考えて蘭を迎えに行ったのだ。
「けど蘭ちゃん毎朝早く来て工藤君の朝ご飯作ってるの？」
と真美が聞くと、蘭は、
「新一、一人暮らしでよく朝ご飯食べないから…」
と、このことは園子以外のクラスメートは知らないため、少し赤くなって答えた。
「まっ、学校が休みの日は事件でもねー限り俺9時半頃まで寝てるからその頃に来るから朝早いとは言えねーけどな」
と新一も続けた。

その後、新一が朝食を食べ終わり学校に向かう途中、
「蘭！新一君！オハヨー！！あっ清水さんもいたんだ」
と言って園子が合流した。
その時ちょうど新一が真美に事件の話を楽しそうにしていたため、園子は、
「ちょっと新一君！！まさか浮気！？あろうことか女房の目の前で！！」
と怒って言った。
「バーロ！！浮気なんかしねーよ！！なあ蘭！」
と新一が言うと蘭は、
「うん…」
と少し悲しそうに答えた。
蘭が悲しそうなのはいつもはポーカーフェイスでいることの多い新一が真美と楽しそうに話していたせいなのだが、新一にしてみれば事件の話をすることが楽しいだけである。

その後、真美は新一に積極的にアプローチをし始めた。
そういう事に疎い新一は自分がアプローチされている事に気付いていないため、それを拒絶しなかった。
そのせいで蘭が悲しそうな顔をしていると、
「蘭…どうかしたか？」
と新一が聞いたが蘭は無理に笑って、
「な…なんでも無いよ…」
と言って教室から出て行った。
新一の頭には『？』マークが浮かんでいたが真美はその様子を見て、蘭が悩み事を自分で抱え込んでしまうタイプだと気付いた。

第7章　亀裂（前書き）

なんか新一がものすごく鈍いです…。
また駄文でスミマセン…。

第7章　亀裂

次の日、いつものようにチャイムの音で目が覚めた新一が、
「よう蘭…」
と眠そうに出ると、目の前に蘭の他に真美もいた。
「し…清水さん！？」
と新一は驚いたが、
「まあ…2人共上がれよ…」
と2人を中に入れた。
「蘭！今日の朝飯何？」
と新一が聞くと蘭は少し顔が明るくなって、
「今日は卵焼きにしようかな？」
と言ってキッチンへ向かった。
その様子を見ていた真美は、
「蘭ちゃん！！私も手伝うよ！！」
と蘭に付いてキッチンに入って行った。

その後、新一達が3人で登校すると、昨日の様子で真美が新一にアプローチしている事に気付いているクラスメート達が、
「よっ！！工藤！！三角関係なんて大変だな～！！」
「しかも両方メチャクチャ美人いいよな～！！」
などと冷やかしてきた。
その冷やかしで蘭は辛そうな顔をしていたが、自分がアプローチされている事に気付いていなかった新一は、
（三角関係？…どういう事だ？）

と思っていた。
一方、真美は平然としているのであった。

その後、積極的にアプローチしている真美に対して新一が嫌がりもしない事（新一はアプローチされている事に気付いていないだけ）にイラだってきた園子が新一に冷たい視線を向けていると、その事に気付いた新一が、
「おい園子…さっきから何睨んでるんだよ？」
と聞くと園子は、
「自分の胸に聞いてみれば？」
とかなり怒りを込めて言って蘭を連れて去って行った。
その後、新一は園子のセリフについて考えていたが結局答えは出なかった。

その後、毎朝、真美は蘭と一緒に新一の朝食を作りに来たり、新一に積極的にアプローチを続けたため、園子が真美に新一と蘭が付き合っている事を伝え、新一にちょっかい出すなと言ったのだか効果はなく、新一に真美が話しかけているのを見るたびに蘭の表情は暗くなり、新一を避けるようになっていった。
新一がやっと自分が真美にアプローチされている事に気付いたのは、それから3日後の事だった。
（蘭が最近暗かったのは俺のせいか…最悪だな俺…）
と考え、新一は蘭に謝ろうと蘭の席に向かったが蘭に話し掛けり前に蘭と一緒にいた真美が新一に気付いて、
「あっ！工藤君！！」
と新一に話し掛け始め、それを見た蘭は悲しそうな顔をして教室を

出て行った。
「おいちょっと待て！！おい！蘭！！」
と新一が呼び止めたが蘭は止まらずに行ってしまった。
その後園子が新一に『最低』と言うような視線を向けた後、蘭を追いかけて行った。
その後も新一は蘭に話し掛けようとするたびに、蘭のそばにいる真美に捕まって蘭と話す事ができないという事が何度も続いた。真美がいつも蘭と一緒にいるのは名探偵の新一を付け回すと撒かれる可能性が高いが新一といつも一緒にいる蘭と一緒にいれば、新一の方から蘭に話し掛けようと来るし、自分が蘭より先に新一に話し掛け続ければうまくいけば新一と蘭の間に亀裂ができるかもしれないと考えたためである。
こんな状態になっても蘭が真美を拒絶しないのは蘭の自分の事は自分で背負い込む性格と自分の事より先に人の事ばかり考えるお人好しが故である。

学校が終わり、新一は自宅で、
（最近蘭に避けられているのは清水にアプローチされている事だよな…蘭に話し掛けようとしてもいつも蘭のそばに清水がいて捕まっちまうし…アイツ狙ってるんじゃ？…全く…どうしたらいいのかね～？）
と考えていた。
電話やメールで蘭に伝えるという手もあるがコナンだった頃に蘭と電話越しでしか新一として話せなかった事がトラウマになっていて新一は大切な事を電話やメールで伝える事は嫌なのだ。
新一はしばらく考えて、
（ヤッパリ…アイツに相談するか…明日はちょうど土曜日だし…）
という結論を出した。

第8章　恐怖の相談

次の日、新一はいつもより早く起きて隣の阿笠邸に来て、チャイムを鳴らした。
しばらくして、
「ハ～イ…」
と少しイラついたような声と共に赤みがかった茶髪の小学生の少女が顔を出した。
その少女は来客が新一だと気付いた途端ドアを閉めた。
「オ…オイ！哀！急に閉めるなよ！！てか開けろ！！」
と新一が焦って言うとその少女、灰原哀はドアを開け鋭い目つきで新一を睨んで、
「あら…あなたが非常識な時間に来たのがいけないんじゃなくて？博士はまだ寝てるわよ…私だってあなたのチャイムに起こされなければまだ寝てるわ…」
と言った。
「非常識な時間って…もう8時だぞ…」
と新一がツッコんだが哀はそれを無視して、
「まあいいわ…上がって…まあこんな非常識な時間に来たんだから大した要件じゃなかったら…覚悟した方がいいわよ」
と言った。
新一が哀に促されてソファーに座ると、
「コーヒーでいいわよね？」
と言って哀はコーヒーを淹れ始めた。
哀は新一にコーヒーをわたした後、
「…で、用事って何かしら？」
と聞いた。
「ああ…」
と新一は答え、一口コーヒーを飲んでから最近蘭と疎遠ぎみになっ

ていることやその原因を話した。
「ふーん…なるほどね…で、どうしたらいいかわからなくなったあなたは私に泣きついてきた…という事ね？」
と哀が新一の話を聞いて言うと、新一はジト目で、
「泣きついたって…俺は相談に来たんだけど？」
と答えた。
　しかし哀はそのツッコミも無視して、
「でも天下の高校生探偵工藤新一が小学生に恋愛の相談するなんてね…どうして私なのかしら？」
と聞いた。
「小学生って…確かにそうだが…オメーは俺より年上だろ…それにオメーは高校生探偵工藤新一の相棒だろ？だから相棒に相談しに来たんだ」
と新一が答えると、
「相棒ね…私はあなたの相棒になるなんて一言も言ってないけど…まあいいわ…」
と言ってコーヒーを啜って、
「ちょっと地下室から持ってこないといけない物があるからちょっと待ってて…」
と言って哀は地下室に向かった。

　しばらくして、
「お待たせ…」
と言って戻ってきた哀の手に持ってる物を見た新一は、
「あ…哀…何持ってるんだ？」
と冷や汗をかきながら聞いた。
　哀は、
「見てわからない？注射器よ…」

と平然に言った。
そう、哀が持っているのは本物の注射器である。
しかも何か薬が入っている。
「なんでんな物持ってるんだ？」
と新一が聞くと、
「あなたが江戸川コナンから工藤新一に戻る時言ったでしょ？蘭さんを幸せにできなかったら薬のモルモット…つまり実験体にするって…今回あなたに相談された事はすでに蘭さんに相談されていたのよ…で、その時あなたには実験体になってもらうことが決定したってワケ…蘭さんを幸せに出来てないからね…」
と哀は普通の小学生はしないような不気味な微笑みをしながら答えた。
新一は逃げようとしたが、体が動かなかった。
（か…体が動かねー…）
と新一が考えていると、哀は新一の心を見透かしたように、
「ごめんなさい工藤君…あなたが逃げたり暴れたりしないようにコーヒーの中に痺れ薬を入れておいたわ…そろそろ効き始めてるんじゃない？」
と言って近づいてきた。
（オイ！！止めろ！！哀！！）
痺れ薬で喋れない新一は心の中で叫んでいたが、当然哀には聞こえていなかった。
「まあ…安心しなさい…命には関わらないから…」
と哀は言って新一の腕に注射針を向けた。
（『命には』ってなんだよ『には』って！！それじゃ死なねーけどヤバいことになるってことじゃねーか！！）
と心の中で叫んでいる新一をよそに哀は新一にその薬を注射した。

第9章　半年ぶりの再会（前書き）

誰と半年ぶりの再会なのかだいたいわかりますよね？

第9章　半年ぶりの再会

新一が阿笠邸を訪れて1時間半ほどして、
ピーンボーン
とまた阿笠邸のチャイムが鳴った。
「まったく…今日は朝から来客が多いわね…」
と呟きながら哀が出ると、そこには蘭と真美が立っていた。
「あら蘭さん…」
と哀は新一が来た時とは打って変わって優しい顔で言った。
その後、真美を見て、
「この人は？」
と聞いた。
「ああ…クラスメートの清水真美さん…」
と蘭が紹介すると、哀は素っ気なく、
「そう…」
と答えて真美を一瞬鋭い目つきで睨み、その後、
「立ち話もなんだし…上がって」
と2人を家に上げた。
すると、真美が哀に、
「ねぇ、ここに工藤君来てる？さっき工藤君の家にいなくて、蘭ちゃんがもしかしたらここにいるかもって言ってたけど？」
と聞くと哀は、
「今ここに工藤君はいないけど…半年くらいぶりに彼ならいるわ…蘭さんにとっては懐かしい人のはずよ…」
と言ってリビングの扉を開けた。
リビングにはすでに2人の人物がいた。
1人はこの家の家主、阿笠博士でもう1人は哀と同い年くらいで小学生の頃の新一にそっくりな眼鏡を掛けた少年だった。
「し…しんい…」

とその少年の正体を知っている蘭は少年の姿に驚いて彼の本名を言いそうになったが、
「久しぶりだね！！蘭姉ちゃん！！」
とその少年は真美をチラっと見ながら蘭の言葉を遮るように言った。
「コ…コナン君！！…ど…どうして？」
と蘭が新一が江戸川コナンになっていることに驚いていると、コナンは子供っぽく、
「久しぶりにこっちに来たんだ！！」
と言った。
　コナンの存在を知らない真美に、
「ねぇ、蘭ちゃん…この子誰？」
と聞かれて蘭は、
「この子は江戸川コナン君…去年1年くらい家で預かってた男の子で新一の親戚の子」
と答えた。
「ふ～ん…そういえば工藤君に似てるね！！」
と真美は言って、
「でも、ここにも工藤君いないね～…蘭ちゃん他に心当たり無い？」
と真美は蘭に聞いた。
「え～と…」
目の前にいる江戸川コナンが工藤新一と同一人物だと言えないで困っている蘭を見て真美は心当たりが無いのだと思って、
「そうか～…じゃあ2人で探そう！！」
と蘭と引っ張って行こうとした時コナンが、
「僕、蘭姉ちゃんと一緒にいたいな～！！久しぶりだし…」
と慌て言った。
　そのセリフで真美は、
「じゃあ、蘭ちゃんはその子と一緒にいてあげなよ！！」
と言って、新一を探しに阿笠邸を出て行った。

第１０章　哀の作戦（前書き）

コナンのことを『新一』と呼んだりしているので少しわかりずらいかもしれません。

第１０章　哀の作戦

真美が出て行った後、新一がコナンになっていることにまだ驚きを隠せないでいる蘭はコナンに、
「新一…どうしてまたコナン君になっちゃってるの？」
と聞いた。
コナンは機嫌悪そうに、
「知るかよ…俺はこのマッドサイエンティストに妙な薬注射されただけなんだから…コイツに聞いてくれ」
と哀の方をジト目しながら言った。
コナンのセリフに、哀は苦笑した後、
「あらマッドサイエンティストなんてずいぶんな物言いね…
工藤君に注射した薬はＡＰＴＸ４８６９で一度幼児化した人間を一時的に再び幼児化させる薬よ…」
と説明した。
「じゃあ…新一以外の人に注射するとどうなるの？」
と蘭が聞くと哀は、
「どうもならないわ…工藤君の細胞はＡＰＴＸ４８６９で１０年分幼児化したことを記憶していて…何か引き金となる事があればまた１０年分幼児化できるわ…普通その引き金となるような事は無いけど…この薬はその引き金を引く薬なの…つまり、私が幼児化したままでＡＰＴＸ４８６９が世間に出回る可能性が０に等しい今、この薬は工藤君ただ１人にしか作用しないわ…」
と説明した。
「オメーさっき『一時的に幼児化させる薬』って言ってたんだからちゃんと元に戻るんだよな？」
とコナンが聞くと、哀は平然と、
「ええ…個人差はあるだろうけど薬の効力は約７２時間…薬の効力が切れれば工藤新一に戻れるわ…」

と答えた。
「良かったね新一」
と蘭が言うとコナンは
「良かねーよ…」
と未だに哀を睨みながら言った。
コナンに睨まれていることに気付いた哀は、
「あら、私はあなたによかれと思ってこの薬をあなたに摂取したんだけど？」
と言った。
「ハァ？」
とコナンが意味が分からないというように言うと、
「あなたさっき私に相談しに来た時言ってたでしょ？蘭さんとちゃんと話しようとしてもさっき蘭さんと一緒に来た人に捕まって話ができないって…確かに工藤新一のままだったらそうかもしれないけど…流石にあの人だって蘭さんと話しているのが小学生だったらノーマークでしょう？幸い今あの人工藤君を探していないし…ちゃんと2人で話をするチャンスなんじゃない？」
と2人に言った。
それを聞いたコナンは急に顔を明るくして、
「なるほど！！ありがとうな灰原！！」
と言った。
その時蘭が、
「あれ？新一今哀ちゃんのこと『灰原』って呼んだよね？新一元に戻ってからは哀ちゃんのこと『哀』って呼んでたのに…」
と言った。
蘭の言葉にコナンは、
「そういえば…そうだな…なんか今『哀』より『灰原』の方がしっくりきたんだよな…なんでだろ？」
と考えていた。
すると哀が、

「もしかしたら…工藤君、あなた無意識の内に工藤新一の人格と江戸川コナンの人格を分けているのかもしれないわね…だから江戸川コナンになって私の事をまた『灰原』って呼ぶようになった…」
と言った。
哀のセリフにコナンが、
「なるほど！！」
と感心していると、
「でも新一私に対する態度は新一のままだよ？」
と蘭が言った。
蘭の疑問にコナンは、
「もしかしたら…蘭が俺のと『新一』として話してるからじゃねーか？オメーに正体がバレてから『コナン』として話す時と『新一』として話す時の両方あったから…」
と言った。
コナンのセリフで蘭が、
「そっか…じゃあコナン君3日間よろしくね！！」
と言うとコナンは、
「うん！！蘭姉ちゃん！！」
と答えた。
その様子を見た哀が、
「今のわざとじゃないでしょうね？」
と聞くとコナンは、
「イヤ…わざとじゃねー…」
と答えた。
「ってことは私の仮説は当たってる可能性が高いわね…それよりこんな無駄話より、2人でちゃんと話しなくていいの？…工藤新一君？」
と哀が言うとコナンは慌て、
「そうだな…蘭行こうぜ！話す場所は俺ん家でいいよな？誰もいねーし…」

と言って、小さい体で蘭の手を引いて阿笠邸を出て行った。

第11章　信じる

蘭とコナンは工藤邸の書斎に来ていた。
「悪いな…蘭…不安な思いさせちまって…」
とコナンは眼鏡を外しながら言って、
「全く…鈍すぎるぜ…俺…清水にあんなに言い寄られてたのにそれに気付いたのが昨日なんてよぉ…」
と自嘲ぎみに呟いた。
蘭はコナンのセリフに驚いて、
「まさか…新一清水さんに言い寄られてたこと気付いてなかったの？」
と聞いた。
コナンは苦笑して、
「ああ…昨日まで全く気付いてなかったよ…だから何で清水といると蘭が悲しそうな顔してどっか行っちまうのかも何で園子があんなに怒ってたのも全くわかんなかった…最悪だよな？…俺…」
と言った。
蘭はしばらくポカーンとしていたが、クスクス笑いだした。
「蘭？」
とコナンが急に笑い出した蘭を不思議そうに呼ぶと、
「なんか新一らしいなって」
と答えた。
蘭の答えにコナンは少し赤くなって、
「と…とにかく！！俺は蘭しか見てねーし…蘭以外の奴なんて考えられねーから…信じてくれねーか？」
とコナンは言った。
コナン（新一）のキザなセリフに蘭は赤くなって、
「バッカじゃないの！？」
と怒ったように言った。

「蘭？」
とコナンが不安そうに聞くと蘭は、
「新一の事信じてるに決まってるじゃない！！信じてなかったら新一がコナン君だった時、新一の事ずっと待ってるなんてできないわよ！！あの時はコナン君が新一だなんて知らなかったし…私はずっと新一の事信じてるんだから！！…そりゃあ、新一が清水さんと楽しそうに話してるのを見て悲しかったり不安になったけど…それでも私は新一の事信じてるんだからね！！」
と蘭は怒って言った。
コナンは蘭の勢いに圧倒されていたが、
「サンキュ…蘭…俺も蘭の事信じてるぜ…誰よりもな…」
と言って2人で笑いあった。

しばらくしてから、
「あっそうだ！！コナン君これから3日間家に来ない？その体で一人暮らしは大変でしょ？」
と蘭はコナンに聞いた。
コナンは、
「いいけど…小五郎のおじさんが許してくれるかなぁ？おじさん僕の正体知ってるし…」
と答えた。
やはり蘭にコナンと呼ばれると無意識に子供口調になってしまうらしい。
コナンの答えに蘭は、
「大丈夫だよ！！新一ならともかくコナン君なら！お父さん、コナン君が新一に戻ってしばらく淋しそうにしてたし、いざとなったら私の空手があるしね？」
と笑顔で答えた。

コナンは、
「う…うん…」
と答えながら、
（いざとなったら空手があるって…おっちゃんが許してくれなかったら空手で脅すって事かよ？…コエー…）
と思っていた。
「じゃあ行こう！！コナン君！！」
と蘭はコナンの手を引いて工藤邸を出て行った。

第１２章　少年探偵団との再会

コナンと蘭が工藤邸を出ると、
「コ…コナン君！？」
と聞き覚えのある女の子の声がした。
コナンが振り返ると、歩美、元太、光彦が驚いた表情でコナンを見ていた。
「お…お前ら！！どうして！？」
とコナンが言うと、
「灰原さんを迎えに来て…それより『どうして』はこっちのセリフですよ！！コナン君！どうして、新一さんがまたコナン君になってるんですか！？」
「もしかして、また悪い奴らに変な薬飲まさたのかよ？」
と光彦と元太が迫って来た。
「えーっと…」
哀の正体を知らない３人に本当の事を話す訳にもいかずコナンが何て言おうか迷っていると、阿笠邸から出て来た哀が欠伸をしながら、
「博士が作った薬を飲んだらこうなったのよ…博士が言うには３日間は江戸川コナンのままだそうよ…」
と答えた。
（ハハハ…）
哀の答えにコナンが苦笑いしていると歩美が、
「でも、３日間はまたコナン君と一緒に遊べるね！！」
と嬉しそうに言った。
すると蘭が、
「じゃあ、お父さんには私が言っとくからコナン君はみんなと遊んできなよ！帰りは間違えて新一の家に帰らないように！」
と笑いながら言って、帰って行った。

その後、コナン達は、公園に来ていた。
「…で、これから何するんだ？」
とコナンが聞くと、
「久しぶりにかくれんぼしない？」
「いいですね！」
「じゃあ決まりだな！！」
と本当の子供３人が勝手に話しを進めていた。
「…ったく…相変わらずガキのテンションには付いてけねーぜ…」
とコナンが愚痴ってると、哀が、
「あの子達は久しぶりにあなたと遊べるのが嬉しいのよ…あの子達はあなたの正体知ってるけど、存在としては別の存在なんでしょうね…」
と言った。
「コナン君と哀ちゃんもかくれんぼでいいよね？」
と歩美がコナンと哀に聞くと、哀は、
「ええ…」
と答え、コナンは、
「いいけど…この公園の外に出るなよ！！あと車とか移動する可能性のある物に隠れるのも無しだ！！前みたいなことになるのはゴメンだからな！！」
と答えた。
「前みたいなこと？」
とその場にいなかった哀が聞くと、歩美達は楽しそうに、哀が転校してくる前に、あった事件を話し始めた。
「ふーん…名探偵さんがそんな勘違いをするなんてね～…」
と哀は歩美の隠れていた車をコナンが連続誘拐犯の車と勘違いしていたことを聞いてコナンに言った。
「ウッセー！！とにかくかくれんぼ始めようぜ！！」

とコナンが言ったことでかくれんぼが始まり、その日は事件も起こらず終わった。

第１２章　少年探偵団との再会（後書き）

しばらく転校生との三角関係からは脱線すると思います…。

第13章　やっかいな訪問者達

歩美達と遊び終わり、コナンが毛利探偵事務所に行くと、蘭も小五郎もコナンを新一としてじゃなくコナンとして接してくれた。
また、蘭曰わく、小五郎はコナンが新一に戻るまで、探偵事務所にいることをすぐ許してくれたため空手を使わないですんだらしい。

次の日の朝、3人が朝食を食べていると、
ピーンポーン
とチャイムが鳴った。
蘭が出て行くと、
「よう！！ネーチャン！！工藤ここに来とるか？」
と聞き慣れた関西弁の声が聞こえてきて、ちょうど味噌汁を飲んでいたコナンはむせてしまった。
小五郎とコナンも玄関に行ってみると案の定、平次と和葉が立っていた。
「何しに来たんだ？大阪の色黒坊主！！」
と小五郎が平次に不機嫌に言うと平次は笑いながら、
「昨日、あのちっさいネーチャンから工藤がおもろいことになっとるって電話が来たから来てみたんや！！…けど、工藤ん家に行っても居らんかったからここに来てみたんやけど…」
「ここにも居らんみたいやね～工藤君…なあ蘭ちゃん、どこにおるか知らん？」
と平次と和葉は聞きながらキョロキョロしていたが、新一がまた小さくなってコナンになってることを知らないため、目線が上でコナンの存在に気付いていないようだった。
「あのー…服部君に和葉ちゃん…2人共目線が上すぎる…かな？」

と蘭が苦笑いしながら言うと、２人は目線を下にしてコナンに気付いた。

「なんや！！工藤またちっちゃなっとるんか？」
「ほんまや…コナン君になっとる…」
と２人が驚いているとコナンが平次に向かって、
「ったく…毎度毎度アポ無しで来やがって…」
と言った。
　すると、平次は、
「まあええやんけ！手土産も持ってきたし機嫌直し！！」
と持ってる物をコナンにわたして言った。
　それを受け取ったコナンが、
「薔薇かよ…」
と半目で言った。平次がコナンにわたしたのは深紅の薔薇の花束だった。
　コナンのセリフに平次は、
「薔薇？…なんで俺、薔薇なんて持ってるんや？大阪で有名な店の菓子折りを持って来たはずやで！！」
と驚きながら叫んだ。
　平次が叫んでいると平次の後ろから、
「こん中お菓子が入ってんの！？ラッキー！！早速お茶にしようぜお茶！！」
「ちょっと！勝手に平次君の持ち主すり替えちゃダメじゃないバ快斗！！」
と快斗と青子の声がした。
「コラ黒羽！！お前にやるわけちゃうんやからな！！」
と平次が菓子折りを持ってる快斗に怒ると快斗は、
「も～！！平次のケチ！！ケチな男なんて嫌いや！！」
と和葉の声を出して言った。
「和葉の声を出すな！！気色悪いやろ！！ってか菓子折り返せ！！」

と快斗と平次が喧嘩を始めて、快斗達が来た理由も平次と同じと予想できたコナンやその他の皆はため息をついていた。

この後、壮絶な口喧嘩をしていた快斗と平次は近所迷惑だと小五郎に拳骨されたのであった。

第１４章　探偵事務所での会話（前書き）

あまり話は進みません…。

第１４章　探偵事務所での会話

小五郎の拳骨で平次と快斗の喧嘩が終わった直後、
「おはようございます！！コナン君！！」
「遊びに来たぜ！！」
と元太、光彦、歩美、哀が遊びに来た。
「よう！オメーら！」
とコナンが答えると歩美が平次達に気付いて、
「あれ？平次お兄さんに快斗お兄さん、和葉お姉さんと青子お姉さん…どうしたの？」
と聞いた。
歩美の質問に平次が笑いながら、
「工藤がまたちっちゃなっとるって聞いたからな！冷やかしがてら遊びに来たんや！！」
と答えた。
（冷やかしがてらってオイ…）
とコナンが心の中でツッコんでいると青子が、
「ねぇ！！せっかくだしみんなでどっかにパーッと遊びに行かない？」
と提案して、
「おっ！たまには青子もいいこと言うじゃん！行こうぜ」
と快斗も賛成した。
すると蘭が、
「ならトロピカルランドに行かない？」
と言った。
蘭の提案に和葉は、
「ええやん！！行こう！！前はどっかのアホが事件に首突っ込んで行かれへんかったし！！」
と平次の方を睨みながら言った。

「行こう！！行こう！！ねっ！！哀ちゃん！！コナン君！！」
「ええ…」
「そうだな…」
コナンと哀はあまり乗り気では無かったが歩美があまりにも嬉しそうだったので、承諾した。
　みんながトロピカルランドに行くことが決まってきた時小五郎が、
「悪いが俺は依頼があるからな！」
と言った。
　すると平次が、
「おっちゃん！！どんな依頼や？」
とコナンを抱えて尋ねた。
　小五郎が平次の勢いに圧倒されながらも、
「ああ…ただの浮気調査だよ！！お前が面白がるような要素は何もないな！！」
とイライラした口調で答えると、
「なんや…つまらんなー…」
とコナンを下ろした。
　平次のセリフに和葉は、
「つまらんってまさか平次…事件やったらトロピカルランドやのーてそっち行く気やったんやないやろうなー？それもコナン君を抱えてたっちゅーことはコナン君も連れてく気やったんやな？」
とジト目で言った。
「そらそうに決まってるやろ！！なぁ工藤？」
と平次はコナンを味方につけようとしたが、
「俺は浮気調査って知ってたから調査に行く気はサラサラねーよ…」
と答えたため平次は和葉に完敗した。
　とにもかくにもこうしてコナン、蘭、平次、和葉、快斗、青子、哀、元太、光彦、歩美の１０人はトロピカルランドに行くことになった。

第15章　トロピカルランド

トロピカルランドに到着して歩美達がはしゃいでいる時、コナンは感傷的な表情をしていた。
「あら…やけに黄昏てるじゃない？」
とその表情に気付いた哀が聞くとコナンは、
「ああ…この姿でまたここに来るとは思ってなかったからな…ここは俺が江戸川コナンになった所だから…」
と答えた。
　２人の会話を聞いていた蘭は、
「ホラ、コナン君！あんまり浸ってるとみんなに置いてかれちゃうよ！！哀ちゃんも行こう！！」
と２人を呼びかけた。
「あっ！待ってよ蘭姉ちゃん！！」
とコナンが慌て走り出したのをみて哀はクスッと笑いその後に続いた。

「ねぇコナン君！！次何乗る？」「コナン！！あっちにジェットコースターあるぜ！！」
「いいですね！！みんなで乗りましょう！！ねっコナン君！！」
一同がトロピカルランドに来て１時間、歩美、元太、光彦がコナンに話しかけているのを見て、
「歩美ちゃん達、コナン君にべったりやな～」
と和葉は呟いていた。
「きっとコナン君として一緒に遊べるのが嬉しいんだよ。コナン君と新一が同一人物だって分かっててもなんとなく別人って感じがするんじゃない？私もそうだし…」

と蘭が優しそうな目で言うと平次は首をひねりながら、
「そうか？俺は普通の工藤もちっさくなっとる工藤も別に変わらんと思うで…」
と呟いた。
　平次の呟きに快斗は、
「それは平次は早い段階で新一の正体に気付いて小さい姿でも新一が素のままでいたからだな…だから平次にはみんなの気持ちが分かんないんだよ！」
と平次をおちょくった。
「なんやと？黒羽！！お前やってそうなんとちゃうんか？」
と平次と快斗がまた言い争いを始めた。
「ちょっ…ちょっと2人共？」
と蘭が止めようとすると、
「蘭ちゃん…バ快斗なんてほっといていいから…」
「せや！！アホな平次もほっといてええで！！今はあんなアホ共置いて楽しまな！！」
「子供達にはコナン君と哀ちゃんがいるから大丈夫だし…バ快斗達置いて青子達は青子達で遊ぼう！」
と青子と和葉に止められた。
　こうして、しばらく快斗と平次は言い争いをしていたがその後はみんな楽しむ事ができていた。

第１６章　ひったくり（前書き）

今回は少し長めです。
探偵達の鎮魂歌のひったくりの場面と似たような感じになってしまいました…。

第16章　ひったくり

コナン達が観覧車に乗る列に並んでいると、一人の男が走って来て青子のバッグをひったくって行った。
「あっ！」
と青子がひったくられたのに気付いた頃にはコナンと平次と快斗は走り出していた。
次に蘭、和葉、青子、少年探偵団がひったくりを追いかけ始めると、唯一まだ追いかけていなかった哀もヤレヤレと首を振ってひったくりを追いかけ始めた。

コナンとひったくりの間に邪魔な人達がいなくなるとコナンはすかさず、どこでもボール発射ベルトからサッカーボールを出してキック力増強シューズで蹴った！！…が、
「ヤベッ！！低すぎた！！」
今まで新一の姿に慣れていたコナンは自分の今の低い背を考慮せずに蹴ったため、低く蹴りすぎたのだった。
しかし、コナンの蹴ったボールはちょうど走っているひったくりの足に当たってひったくりを転ばせることができた。
ひったくりが起き上がろうとして顔を上げると目の前に蘭が立っていた。
ひったくりは蘭を普通の女の子だと思い人質にしようとナイフを向けたが蘭の回し蹴りでぶっ飛ばされ、次に起き上がった時に目の前にいた和葉にも同じようにナイフを向けたが今度は合気道で投げ飛ばされた。
しかし、次にひったくりが起き上がった目の前にはちょうど哀がいて、哀はひったくりに捕まってしまった。

「アカン！！またやってしもうた…」
以前、和葉はナイフを持ったひったくりを投げ飛ばしてちょうど投げ飛ばした先にいた歩美を人質にとられてしまったことがあるのだ。
ひったくりは周りに向かって、
「動くなよ！！動くとこのガキがどうなるかわかんねえぞ！！」
と哀にナイフを向けて叫んだが、ひったくりひ抱えられている哀は、
「ふぁ～～…」
と欠伸をして、
「あら…誰かが動くと、あなたは私をどうするつもりなのかしら？」
と殺気のこもった微笑みをひったくりに向けながら尋ねた。
おそらく、哀が第三者として今の哀を見ていたら今の哀からは組織の気配がしているだろう。
「うっ…」
流石に組織の気配は感じないものの小学校低学年の女の子がナイフを向けられているのにもかかわらず全く怯えず余裕でいるのにひったくりが怯んででいると、
ポン☆
と言う音がしてひったくりが持っていたナイフが深紅の薔薇に変わりひったくりが驚いていると、
「おいおっさん！女の子に向けるならナイフより薔薇の方がいいぜ♪」
と快斗が薔薇とすり替えたナイフを持ちながらウィンクしながら言った。
快斗とセリフに人質のはずの哀は、
「あら…随分キザなセリフね…黒羽君、…でもひったくりなんかに薔薇を向けられもちっとも嬉しくないわ…」
とフフッと微笑みながら答えた。
快斗と哀の会話にひったくりが戸惑っていると、
「隙有りや～！！」
と平次が清掃員から拝借したモップでひったくりの頭を殴りつけて

ひったくりをノックアウトした。　伸びているひったくりからコナンは青子のバッグを取ると、
「はい、青子姉ちゃん」
と青子にわたした。
「ありがとうコナン君」
と言いながら青子はバッグに手を入れて何かを探し始めた。
「おい青子、何探してんだよ？」
と快斗が聞くと、
「あっ！あった～！！」
と言って手錠を出してそれをひったくりに掛けた。
「な…なぁ青子…お前はなんでトロピカルランドに来るたんびに手錠持ってんだ？」
と快斗が冷や汗をかきながら聞くと青子は笑顔で、
「ああ、トロピカルランドだからって持ってきてるんじゃないよ！！実は、キッドが現れたら捕まえてやろうといつも持ってたのがクセになっちゃって～！！」
と答えた。
「あっ…そう…」
と快斗が青くなって答えると、平次が快斗の肩にポンと手を置いて、
「中森の姉ちゃんに自分がキッドってバラした時に許してもらえて良かったな～」
と言った。

一方哀の方は、
「哀ちゃん、大丈夫？怪我してない？」
と蘭が心配そうに聞いていた。
「ええ…大丈夫よ…」

と落ちた時についた土を払いながら答えると和葉が、
「ゴメンなー哀ちゃん…アタシが注意せんかったから…」
ととても申し訳なさそうに謝った。
和葉のセリフに哀は微笑んで、
「大丈夫だから気にしないで」
と言った。
すると哀の集まっていた歩美、元太、光彦が口々に、
「哀ちゃん！！かっこよかった～」
「スゲーなオメー！！」
「でもなんでそんなに冷静でいられたんですか？」
と話しかけた。
光彦の質問に哀は微笑んで、
「当たり前じゃない、ここには私が知ってる最高の探偵達が集まってるもの…工藤君と同一人物の江戸川君に服部君、それにあなた達少年探偵団がね…それに今回一緒にここに来たメンバーはみんな正義感が強くて、誰かを助けるためには自分のことを顧みないような呆れるほどのどうしようもないお人好しばかり…だから安心していられたのよ！みんなで助けてくれるってね…」
と答えた。
「誉めてるんだかけなしてるんだかわかんねーな…」
とそれを聞いたコナンは半目で言ったが、毒舌の中にみんなを信頼していたという気持ちがこもっているのに気付いていた。

第17章　悪だくみ（前書き）

サブタイトルがほぼ関係ないです。

第17章　悪だくみ

ひったくりを捕まえた後、暗くなってきたため帰ることになった。
「じゃー青子達こっちだからじゃーね～！！」
「またな！！」
と、米花町とは逆方向の快斗と青子と別れた後、
「…で、服部、オメーらはもう帰るんだよな？」
とコナンが平次に聞くと、
「俺らはまだ帰らへんぞ。今日はおっちゃんとこに泊めてもらう予定やで！まだ明日も休みやし、お前もそこに泊まってるからなぁ！！」
と言った。
「ハァ？聞いてねーぞ」
と言うと、
「ネーチャンには許可貰うたからＯＫやで。それにあっこは工藤ん家ちゃうからお前にとやかく言われる筋合いはないで！！」
「でもそんな話しいつしたんだ？」
とコナンが聞くと、
「それは俺がお前と一緒にひったくりを警備員に引き渡しているときに和葉が頼んでくれたんや！！」
と笑顔で答えた。
「へー、和葉ちゃんが…」
と蘭や子供達と楽しそうに話している和葉を見ながらコナンが言うと、
「あら…不思議そうな顔ね…」
と哀が話しかけてきた。
「いや…いきなり押しかけてきて泊めてくれって言うのはいつも服部だからな…和葉ちゃんがそう頼むのは珍しいなって思って…」
「そう…」

その後、哀や子供達と別れて、毛利探偵事務所に帰り、蘭と和葉の作った夕飯を食べた後、平次はコナンと一緒に小五郎の部屋に和葉は蘭の部屋で眠った。

次の朝、コナンが目を覚ますと、平次が目の前に笑顔でいて、
「よー！工藤おはようさん！！…けどもう少し寝といてな～！！」
と言って、外してあったコナンの時計型麻酔銃でコナンを眠らせた。

第18章　サプライズ

「コナン君！起きて！！コナン君！！」
平次に麻酔銃で眠らされたコナンは、蘭の声で目が覚めた。
「あっ…蘭姉ちゃん…平次兄ちゃんは？」
とコナンは辺りをキョロキョロしながら聞いた。
「服部君なら博士の家よ！！」
と蘭は答えて、
「さぁコナン君早く着替えて！！もうすぐ時間だから！！」
と続けた。
「えっ？何が？」
とコナンが尋ねたが、
「じゃあ急いでね～！」
と蘭は部屋を出て行った。

コナンが着替えると蘭はコナンの手を引いて阿笠邸に来た。
「さぁコナン君！！中に入って！！」
と蘭に促されて家の中に入ると、
パンパンパン
と何かが破裂する音が数回した。
「なんだ！？」
とコナンが驚いていると、平次、和葉、快斗、青子、哀、元太、光彦、歩美、小五郎、博士がクラッカーを持って立っていた。
「こ…これは？」
とコナンが聞くと、
「コナン君とのお別れ会だよ！」
「お前が新一兄ちゃんに戻っちまった時はできなかったからよ！！」

「今回またコナン君になってしまったからやろうって歩美ちゃんが計画したんですよ！！」
と子供達が説明した。
「…なら服部が俺を眠らせたのはまだ準備の途中だったからか？」
と聞くと平次は、
「そや！！…で工藤が寝とる間に和葉やネーチャンらが料理して、俺と黒羽とボウズ達で会場の準備しとったっちゅうわけや！！」
と言った。
　すると和葉が少しイライラ気味に、
「平次！！今はコナン君とお別れ会や！！今くらい工藤君やのうてコナン君として呼ばな！！」
と注意した。
「あと、青子、前から服部君にネーチャンって呼ばれると違和感あるんだけど…」
と青子も言った。
「うん私も！！」
と蘭も同意した。
「じゃあどう呼べばいいんや？」
と平次が聞くと和葉が、
「『蘭ちゃん』と『青子ちゃん』でええんとちゃう？工藤君や黒羽君もアタシの事『和葉ちゃん』って呼んでるし！」
と提案した。
　その提案に蘭と青子が頷いていると、
「じゃあこれからは蘭ちゃんと青子ちゃんでよろしくな！！…ってなんか変な感じやな…」
と平次が言った。
　すると歩美が、
「でもそっちの方が仲良しさんって感じだね」
と言った。
　そんな姿をコナンが見てると、

「あら…蘭さんと仲良く話してる服部君に嫉妬？江戸川君？」
と『江戸川君』を強調して哀が聞いてきた。
「バーロ！んなんじゃねーよ！！」
とコナンが赤くなって答えてると快斗が、
「パーティーの主役なんだから怒ってるんじゃねーよ！！もっと盛り上がろうぜ！！」
と言ってマジックショーを始めた。

こうして、快斗のマジックショーや平次が作った暗号の謎解き大会を楽しんだり、蘭達の作った美味しい料理を食べたりしてコナンのお別れパーティーは大成功をしたのだった。　パーティーが終わった帰り道、
「良かったねパーティー！！」
と蘭がコナンに話しかけると、
「あぁ…久しぶりにコナンに戻っちまったけど良かったよ…」
コナンはいつの間にか新一の口調に戻っていた。
「でもいつの間にあんな計画したんだ？」
とコナンが聞くと、
「コナン君が服部君とひったくりを警備員に受け渡してる時に歩美ちゃんが提案したの！！あと、詳細はメールでね」
「ふ～ん…」
ここまで話して2人は毛利探偵事務所に到着したのだった。

第１９章　別れ（前書き）

久しぶりに転校生が出てきます。

第19章　別れ

次の日、コナンが朝食を食べ終わった頃、
ピンポーン
とチャイムが鳴った。
「はーい！」
と蘭が出ると、
「蘭ちゃん！！おはよー！！」
と真美が入って来た。
（ハハ…またややこしいのが来たよ…）
とコナンが思ってると、
「じゃあ蘭ちゃん！！新一君迎えに行こう！」
と真美が言うと蘭は、
「新一…まだ帰って来てないよ…事件で忙しいみたい…」
とコナンを見ながら言った。
「そっか～…じゃあちょっと早いけど学校行こうか！」
と真美が提案すると、
「じゃあ僕も博士の家まで付いてくよ」
と言って3人で学校（コナンは阿笠邸）へ向かった。

阿笠邸に着いて、
「じゃあコナン君バイバイ…」
と蘭が言うと、
「蘭姉ちゃんバイバイ！！」
とコナンは精一杯子供らしく言って阿笠邸に入って行った。
「あら…彼女とのお別れはもういいの？」
阿笠邸に入った直後哀がちゃかしたようにコナンに聞くと、

「まぁ、すぐに会えるし、元の姿で…」
と時計を見ながら答えた。
「私は学校に行ってるから…なんかあったら博士に言ってね…一応もしもの時の対応については博士に言ってあるから」
と哀が言うとコナンは面倒くさそうに、
「へいへい…」
とぶかぶかの帝丹高校の制服を着ながら言った。
その時、
「灰原さんおはようございます！！」
「迎えに来たぜ！」
「一緒に行こう！！」
と、光彦、元太、歩美が元気よく入って来た。
哀はランドセルをしょって、
「今行くわ…」
と言って3人と一緒に学校へ行った。

哀が学校に行ってしばらくしてから、
ドクンドクン
とコナンに元に戻るときの発作が襲った。
「グァ！」
とコナンが苦しそうにしていると、
「おい新一、大丈夫か？」
と博士が心配そうに聞いた。
「あぁ…いつもの事だ…」
とコナンが答えた瞬間、
ドクン！！
と強い発作が起こり、
「グァァァァ！！」

というコナンの叫び声が響いた。

第２０章　屋上にて（前書き）

なんかかなりの駄文になってしまいました…。

第２０章　屋上にて

２時限目が終わった休み時間、
「新一まだ来てないね…」
と蘭が新一の席を見ながら呟くと、
「あんなのほっとけばいいよ！事件と聞けば蘭よりも優先して行っちゃうし…あろうことか浮気までしている最低男！！」
と園子が怒ったように言った。
　すると、
「悪かったな…最低男でよ…てか浮気なんかしてねーよバーロ！」
と少々イライラ気味の声がした。
「新一！！遅かったじゃない！！８時半頃には戻ってたんじゃないの！？」
と新一の声を聞いて振り向いた蘭に怒られたが、
「悪い悪い…戻った後かなに疲れたからしばらく仮眠してたんだよ…」
と新一は反論した。
　その時、
「新一君！！おっはよう！！」
と真美が話の中に割って入って来た。
「よぅ清水…」
と答えた後新一は真美に、
「昼休み話があるから屋上に来てくれ…」
と言った。
　そのセリフを聞いた瞬間クラスがどよめき出し、園子が、
「ちょっと新一君！！どういうこと！？蘭がいるのに！！てか蘭も何か言わないと！！」
と怒りだした。
　しかし蘭は、

「大丈夫だよ…私新一を信じてるから！」
と園子をなだめるように言った。
「信じてるって…そんな悠長なこと言ってる場合！？」
と園子は蘭に迫ったが、新一は蘭の目を見てウィンクした。
それを見た蘭も新一に答えるように微笑み返した。

昼休み、真美を屋上に呼んだ新一は真美より少し遅れて来た。
「悪りぃ少し遅れちまった…」
と新一が謝ると真美は、
「いいよ！！それで話って何？」
と期待したように聞いた。
「あぁ…まず…俺は蘭以外の奴なんて考えられねーからな！！」
と強めの口調で言った。
「ど…どういうこと？」
と真美が動揺したように聞くと、
「つまり…清水…お前、俺が蘭に話しかける前に俺に話しかけて俺と蘭を引き離そうとしてただろ！！…で、俺と蘭の間に亀裂ができるように…で、その隙に漬け込むつもりだったんじゃねぇか？」
新一はストレートすぎるかと思いながらも探偵モードに入っていた。
「…そ…そんなことを話すためにわざわざ屋上まで呼んだの！？」
と真美が怒ったように言うと、
「まあ…クラスの他の奴らがいる所では『蘭以外の奴なんて考えられねー』なんて恥ずかしいセリフ言えねーからな…こんな所に呼んで期待させちまって悪かった…でも俺は蘭以外の奴なんて考えられねーよ…ガキの頃からな…」
と答えた。
「私じゃダメなの！？絶対に！？」
と真美が凄い剣幕で新一に詰め寄ろうとした時、
「無駄よ…2人の仲を引き裂くなんて誰にも無理ね…それほど固い

絆で結ばれてるんだから…ホント…呆れるほどね…」
と冷めた声が後ろからした。

第２１章　逃走（前書き）

少し長めです。
あと１話か２話で完結すると思います。

第21章　逃走

新一が声のした方を振り向くと、そこには何故か帝丹高校の制服を着た宮野志保がいた。
「み…宮野！？なんで？」
と新一が戸惑っていたが志保は構わず、
「その証拠にある事件の捜査で工藤君が1年近く行方不明だった時、蘭さんはずっと工藤君を待ち続けてたし…工藤君は蘭さんが自分を待ってくれてるってことを心の支えにしてたもの…救いようもないバカップルね…まあ当時はまだ付き合ってなかったけどね…」
と続けた。
（バカップルってオイ…）
と新一が思っていると真美は見知らぬ人の突然の登場に、
「あ…あなた誰？」
と驚いて聞いた。
真美の問いに志保は、
「宮野志保…工藤君との関係はそうね…探偵としての相棒ってところかしら…工藤君曰わくね…」
とクールに答えた後、新一の方を向いて、
「さぁ…用事が終わったなら教室に戻った方がいいんじゃない？蘭さんも待ってるだろうし…」
と言って新一の手を引っ張って屋上を出て行った。

一方、教室では、
「蘭！新一君の様子見に行かなくていいの！？どんな話してるか気にならないの！？」

と園子が蘭に詰め寄っていた。
「私新一を信じてるから大丈夫！！」
と蘭が答えると、
「蘭はお人好しすぎるよ！！アイツ最近いつも清水さんといたじゃん！！」
と園子はさらに詰め寄った。
「オメーが心配するようなことは何にもねぇよ！！」
教室に着いた新一は園子のセリフが聞こえてその言葉に反論した。
「新一！！」
と蘭が呼ぶと、
「大丈夫！！ちゃんと清水には言っといたから『俺は蘭以外の奴なんて考えられねー』ってな！」
と蘭だけに聞こえるように言った。
　そのセリフに蘭が赤くなってると、
「たいへんだ～！！」
と一人の男子が教室に慌て入って来た。
「どうしたんだよ？そんなに慌て…」
と近くにいる男子が聞くと、
「い…今…教室の前に見たこともないスッゲェ美人が立ってて…どうしたのか聞いたら…『工藤君待ってるの…』だってよ！！だ…だから…工藤は毛利と清水の二股じゃなくて…さ…三股だったんだ！！」
と切れ切れのセリフで言った。
「…新一？…」
クラス中がどよめいている中、蘭は静かだがドスの利いた声で新一を呼んだ。
　新一は慌てながら、
「勘違いするな！！何故か宮野が来てるんだよ！！」
と本当のことを言ったが、
「アンタねぇ…そんなウソが通用すると思ってるの！？」

と園子もキレていた。
「ウソじゃねーよ！！」
と新一が慌てながら答えると、
「クスッ…名探偵さんも焦ると形無しね…」
と志保が入って来た。
「し…志保ちゃん…なんで？」
と蘭が志保に聞くと、
「蘭…聞いても無駄だぜ…俺もさっきから聞いてるんだけど…全く答える気配ねぇ…」
と新一が言った。
　すると志保は、
「あら…その話をするにはあなたが去年ずっと追い続けていた事件に関することも話さないといけないじゃない…その事件については世間には知らない方がいいでしょ？だからこんな誰が聞いているか分からない状況では話せないのよ…そんなことも分からなかったの？名探偵さん？」
と志保は新一に反論した。
「ニャロ…」
と新一が呟いた時、
「おい工藤！！誰なんだよこの美人は！？」
「どういう関係なんだよ工藤！？」
などとクラスの男子が口々に聞いてきた。
「だ～！！うるせー！！オメーら静かにしろ！！」
と新一が怒鳴ったが一向に効果がなかったため、
「しゃあねぇ…逃げるぞ蘭！！宮野！！」
と言って自分と蘭のカバンを持った後、蘭の手を引っ張って走り出した。
「えっ？」
と急なことで蘭は戸惑っていたが、気にせず、
「園子！！後任せた！！あんま余計なこと話すなよ！！…ほら宮野

行くぞ！」
と志保を呼んで、逃走した。

第２２章　帰路にて（前書き）

いよいよ完結です！！

第２２章　帰路にて

「ここまで来れば誰も追って来ねーよな…」
と新一が呟くと、
「当たり前じゃない！！学校から出てるんだから！！」
と蘭が怒ったように言った。
怒られた新一は、
「しゃあねぇだろ…まあいまさら教室に戻ってもややこしくなるだけだ！帰ろうぜ蘭！」
と言った。
「えぇっ！？でも勝手に…」
と蘭が驚いていると、新一は携帯を出して、
「園子に『逃げてる途中に目暮警部に事件だって呼ばれたから蘭と行くな！蘭もその事件の証人だから』とでもメールしときゃ大丈夫だろ…あいつならウソだと解っても気をきかせてくれるだろうし…」
とメールをうちながら答えた。
「で…でも…」
とまだ蘭が渋ってると、
「まあたまにはいいんじゃない？」
と志保が言って３人で帰ることになった。

「…で、オメーはどうして元の姿に戻ってるんだ？…てか小学校は？朝行ってたよな？」
と新一は志保に聞いた。
「どうして元の姿に戻ってるのかなんてＡＰＴＸ４８６９の解毒剤飲んだに決まってるじゃない…まぁ効き目は２４時間だけど…小学校は具合悪いって言って早退したのよ…」
とクールに答えた。

志保の答えに新一は、
「仮病かよ…てかＡＰＴＸ４８６９の解毒剤そんなに何度も飲んで大丈夫かよ？」
と聞いた。
「えぇ…私の飲んだ解毒剤は効き目は２４時間で１年間ずっと飲み続けても５分と差が出ないわ…」
と答えた。
「そんなんが作れるんだったら…」
「もっと早く作れよとでも言いたいんでしょうけど…これはＡＰＴＸ４８６９の完全なデータがあったから作れた代物…あなたに完全に元に戻れる解毒剤を作った後に開発し始めたものよ…」
新一のセリフは志保に途中であしらわれてしまった。
新一と志保の会話が終わった頃、
「ねぇ志保ちゃん…その制服どうしたの？帝丹の制服って特注だけど…」
と聞いた。
「ああこれ？黒羽君に作ってもらったの…彼に作ってもらえば　タダだから助かるわ…」
と答えた。
そのセリフに少々引っかかった新一は、
「なぁ宮野…ってことは黒羽にはあらかじめこの計画話してたんだよな？」
と尋ねた。
「えぇ…」
と志保が答えると、
「ならオメー服部に連絡してねえだろ？『俺がおもしろいことになってる』って…」
「服部君に？連絡なんてしてないわ…あなた何が言いたいの？」
新一の質問に志保が訳が分からないというふうに答えた。
「えっ？でも服部君は志保ちゃんから連絡が来たって…」

と蘭が戸惑ったように言うと、
「黒羽だよ…あいつが宮野の声色で服部を呼んだんだ…番号は非通知でも相手が宮野なら服部もあんま怪しまないだろうし…」
と新一は答えた。
　すると志保も、
「なるほどね…なら動機は『服部君達がいた方がおもしろいから』ってところかしら…」
「そういうこと！」
と新一と志保の推理に蘭も、
「黒羽君ならやりそうかも…」
と納得した。

　しばらくして、
「あ～っ！！お父さんがいるからこんな早く帰れないよ！どっか出掛けるにしても制服じゃ不自然だし…どうしよう…」
と蘭が困ったように呟いた。
「なら博士ん家に来ない？博士また新しいゲーム作ったのよ…今回は謎を工藤君が監修したゲームだからいつものよりはマシなはずよ…」
と提案した。
「そうなの？…でも新一が監修したのか～難かしそうね…」
「んなことねぇよ！！元太達のために子供向けにしてあるぜ…でもまだあいつらもやってねえのに俺達が先でいいのか？」
と新一が聞くと、
「あの子達がやる前に博士以外の人がやれば博士が気付かなかった問題点に気付いたりするからいいんじゃない？」
と答えた。
「じゃあ久しぶりに博士のゲームやろうかな…」
と蘭が言うと、

「博士喜ぶでしょうね…」
と志保が答えた。
この後、蘭と新一は久しぶりに阿笠博士の作ったゲームを楽しんだのであった。

（ＥＮＤ）

第２２章　帰路にて（後書き）

今回はやってみたかった三角関係ものとコナンの復活というのを両方やってみました！！
次回の冬編はまた誰かを復活させたいと思います！！
誰かというと…冬といえば雪…雪といえば白…白といえば…
いつになるかわかりませんがお楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8359i/

秋の大騒動

2010年10月10日11時26分発行